

JSIR NEWS LETTER

国際リハビリテーション研究会

vol.23 2024年4月28日発行



巻頭言

『今できることから、コツコツと』

寺村 晃（国際リハビリテーション研究会事務局、
大阪保健医療大学 保健医療学部）

〔巻頭言〕
『今できることから、
コツコツと』 寺村 晃

〔特集①〕
『ペルーにおける障害者・
児スポーツプロジェクト』
広田美江

〔特集②〕
『海外・国外での障害者ス
ポーツ支援の経験』
浅見明子

〔連載：研究万華鏡〕
『行く？行かない？
—社会人 大学院への進学
にまつわる雑感—』
齋藤崇志

〔コラム：世界のめがね〕
『3つの「間」』 大西海斗

新年度を迎え、皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか？
新型コロナウイルスの影響が徐々に収束し、海外での活動を再開された方
も多いかと思います。私も、様々な関係者と今後の方向性について話し合
う機会も増えています。

私自身、30歳代後半になり、国際リハビリテーション分野での自分の役
割や位置づけを再考する時期が来たと感じています。特に、「直接活動」
と「間接活動」について深く考えるようになりました。20歳代後半にJICA
海外協力隊として現地での生活と文化を体験し、草の根レベルでの「直接
活動」に取り組んでいました。しかし、30歳代になると、変化するライフ
スタイルや業務バランスにより「間接活動」が増加しました。これには研
修会の運営や講師、学会発表の査読、学術誌の編集、そしてJICA海外協力
隊に関心を持つPT・OTへの個別相談が含まれます。その中で、「直接活
動」「間接活動」ともに、柔軟に対応できるように、また、2023年3月よ
り、毎日オンライン英会話を取り入れ、語学面の底上げを地道に行ってい
る今日この頃です。

40歳代を目前に、「直接活動」および「間接活動」のどちらに重点を置
くか日々考えています。しかし、何よりも重要なのは、「今できることか
ら、コツコツと」取り組むことと、自分自身に言い聞かせています。この
ニュースレターを通じて、皆様との繋がりを一層深め、手の届く範囲から
着実に取り組みつつ、国際リハビリテーション学の発展に共に寄与してい
ければと願っています。

本号の特集

本号では、障害
児・者スポーツ分
野でご活躍されて
いる皆様の経験を
特集します！

【特集①】

ペルーにおける障害者・児スポーツプロジェクト

広田 美江（大分県理学療法士協会国際活動促進委員会、
国立病院機構別府医療センターリハビリテーション科）

草の根技術協力事業とは、日本の団体の国際協力の知見や経験を、国際協力機構
（以下、JICA）と実施する国際共同事業です。筆者は、2013年からの2年間、日
本・ペルー友好国立障害者リハビリテーションセンター（以下、INR）の要請に基
づいて、シニア海外ボランティアとして「ペルー障害者スポーツ事業」を展開しま
した。その活動中から、3年間に渡りのべ30名の理学療法士および理学療法学生を
短期青年海外協力隊として、現地で活動させてきました。

しかしながら、INRでは障害児を対象としたスポーツは、指導方法や運営の難しさのため課題となっていました。2020年に大分県理学療法士協会を提案団体とした、JICA草の根技術協力事業支援型「ペルーにおける障害児スポーツ指導力強化および普及促進プロジェクト」（以下、プロジェクト）が採択されました。本プロジェクトの開始にあたり、2023年2月に現地ベースライン調査を行いました。調査メンバーは、大分県理学療法士協会の4名と現地通訳1名でした。調査期間は、2月6日から9日までの4日間、1日目はINR幹部職員とのミーティング、2日目と3日目は、障害児スポーツおよび理学療法の見学、4日目が障害児スポーツ担当者との面談が主な活動内容でした。また、2023年5月14日から30日までの17日間、大分県別府市においての医師2名と理学療法士4名の本邦研修を実施しました。活動内容は、病院における理学療法の見学、障害児スポーツ研修をはじめ国際webシンポジウムなど幅広い分野での研修を行いました。今回のプロジェクトは、2025年2月で終了です。最終評価として、2024年12月にエンドライン調査を行う予定です。本プロジェクトの目標は、「INRの障害児が継続的にスポーツに参加する」ことです。障害児にとってスポーツのできる環境を整えること、それらはペルーの人々の悲願です。これらを実現させるために、障害児をみんなで支え、障害児スポーツ活動の輪を広げていきます。



【筆者と現地職員の方々との集合写真】



【現地の子ども達がボッチャを行う様子】

【特集②】 海外・国内での障害者スポーツ支援の経験

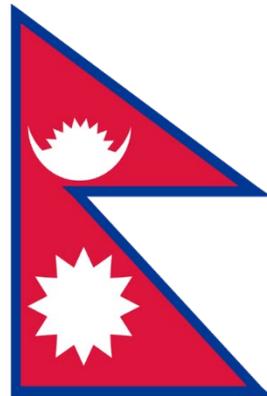
執筆者② 浅見明子（元JICA海外協力隊、J-Workoutトレーナー）

2017年よりJICA海外協力隊にてネパールボッチャ協会所属のコーチとして、ゼロからボッチャを普及するという貴重な経験をしました。ネパールでは学校の先生や障害者施設のスタッフでも“スポーツ”自体初めての経験で、練習をすることや順位を競う大会の仕組みなど知らない人たちと共にスタートしました。

私にとってボッチャとは、約2年間を共に走りぬいた「戦友」という言葉が一番しっくりきます。

最終目標として私の活動期間終了後も現地の方々が自立してボッチャを継続できることを目指し、包括的な普及を行いました。①プレーヤーとなる障害当事者はもちろん、②普及に欠かせない指導者や大会などを運営する審判などの支援者、そして、③重度障害者がスポーツを継続するために生活面や移動などを手伝ってくれる家族や友人などのサポーター、サポーター候補（ただボッチャが好きという健常者など）の普及です。

当事者たちは、ボッチャが上手くなるに伴い生活面でも自立度が上がるなどの成長を、本人たち自身、周りの方々も実感するほどの変化がみられました。継続や更なる普及についても、ボッチャの魅力と可能性を感じ「普及をさせたい！」という協会の想いと共に、私の帰国後も地道に継続的な普及と活動が続いているようです。



現在、脊髄損傷者専門のトレーニングジムのトレーナー兼広報という立場を生かし、新たにパラダンススポーツ（以下、PDS ※旧車いすダンス）競技の普及と育成に携わっています。当事者②の立場となっていました。車いすの操作は得意ですが、社交ダンスもダンスのための身体づくりも専門外、脊髄損傷者以外の障害をもつ車いすユーザーも多くいます。日本ではPDS専門の指導者がおらず、選手のほとんどが東京2020オリパラ前後に興味をもった初心者ばかりです。

ネパールでボッチャが普及・継続し国際大会に出場できるようなレベルに達するか、日本のPDSの普及の行方、どちらも前途多難と感じます。当事者の一員となってしまった今、日本の条件を最大限に生かし、環境に合った普及を駆使して、ライバル、ネパールの戦友に張り合えるよう日本PDSチーム一丸となり頑張ろうと思っている次第です。



【ネパール現地の方がボッチャを行う様子】



【PDSを行う様子】

[連載] 研究万華鏡*

Inspiration for your research

行く？行かない？

—社会人大学院への進学にまつわる雑感—

「社会人大学院に進学するべきでしょうか？」ある日、私は職場の後輩（Aさん）から、こんな相談を受けました。その時、私は既に博士号を取得しており、大学院での学びやそこまでの経験を踏まえて、Aさんは私に意見を求めてきたのです。Aさん曰く、進学に伴う長所（研究ノウハウの習得、知識のブラッシュアップ、等）と短所（学費の負担、仕事・家庭の両立の困難さ、等）を考えると、短所の方が長所よりも大きい気がして進学に踏み出せない、とのことでした。

この種の悩みは、多くの人に共通するものではないでしょうか？私自身も20歳代の時、進学に関して同じ悩みを抱え悶々としていた時期があります。そんな時、当時所属していた職場の上司は、私にこんな助言をくれました。「富士山の山頂からどのような美しい景色が見えるか、頂上に登った人間にしかわからない。大学院進学で何が得られるか、これも進学した人しか分からないだろ？悩んで時間を浪費するくらいなら、思い切って進学したらどうだ？」元上司の受け売りであることを自白しつつ、私はこの言葉をAさんに伝えました。その後、Aさんも私も転職したため、最終的にAさんが進学したか否か、私は分かりません。

私は、この元上司の助言に背中を押され（蹴られ？）大学院に進学しました。今では大学院での学びは自分の財産となっており、助言をくれた元上司には感謝しています。大学院への進学は、人生のターニングポイントの1つだと思います。大学院に行くか？行かないか？選択に悩む方も多いかもかもしれません。そんな時、長所・短所を冷静に比較検討することも大切ですが、自分の直観を信じどちらかを選択する「決断力」も大事かもしれません。

（国立障害者リハビリテーションセンター研究所 齋藤 崇志）

「研究に興味があるが何をすればよいのかわからない…」との声にお応えし、気まぐれに研究について綴ります。

今回より齋藤さんを著者に迎え、新たなサブタイトルを添えて再出発します！事務局では本連載で取り上げてほしいテーマを募集しています。希望テーマがありましたら、事務局までぜひご連絡ください。

【コラム】『世界のめがね』 ～トンガ [3つの間]～

大西 海斗 (国際リハビリテーション研究会事務局、
株式会社コーエイリサーチ&コンサルティング)

今回は、とっても魅力的な国トンガを紹介します。

トンガ王国は南太平洋のポリネシアに位置する170余の島々からなる自然豊かな国です。火山の大噴火と津波が襲い、甚大な被害をもたらしたことは記憶に新しいかもしれません。

「Build back better」の考えに基づく防災や強靱な保険システム構築に係る取組も進められています。

一方、町を歩けば、海岸沿いから響く心地よい波の音と、朗らかな笑顔に包まれた穏やかで優しい時間が流れ、三つの「間」(時間・空間・人間)を強く感じるそんな国です。

つい先日、車で走っていると、ドライバーさんがこのヤシの木を熱く紹介してくれました。皆さんはなにか不思議に感じますか?世界的にはとっても珍しいそうです(私は全くわかりませんでした)。

【3 headed coconut tree】



【お知らせ】

【国際リハビリテーションセミナー2024・第7回通常総会開催】

テーマ：障害児・者スポーツにおける持続可能な支援を考える：ペルー支援プロジェクトの紹介
日時：2024年6月23日(日) 13:30～16:00
開催方法：オンライン [詳細はこちら](#)
※ 総会の成立にあたっては、会員の皆様の出席または委任状が必要です。

【国際リハビリテーション研究会第8回学術大会】

テーマ：国際リハビリテーションにおける地域共創～海外と国内の経験を共有しよう～
日程：2024年11月17日(日)
会場：いろどりの丘(宮城県東松島市野蒜ヶ丘) [詳細はこちら](#)
詳細は追ってお知らせいたします。皆様の一般演題発表、参加をお待ちしております。

本号特集の詳細を
お聞きいただけます!

編集後記

普段聞くことのできない国際リハの具体的な内容を知ることが出来ました。小学生の頃に当時の先生の協力隊活動経験を聞いてから海外での活動に興味を持っていたため、今回の編集は貴重な経験に感じました。(中澤拓馬)

今回編集に関わる中で、海外での活動は病院で働くことだけではなくスポーツの分野でも行われていることを知り特に興味深く感じました。私も将来、国際的な活動をしたいと感じており、貴重な経験となりました。(菊地悠斗)

今回の記事から、私たちの知らない所で多くの日本人の方々が活躍している事を知ることができました。私はいつか海外でも働いてみたいと感じており、そのため今回のゲスト編集の経験は大変興味深いものでした。(齋藤建也)

事務局 編集担当

大西 海斗 (コーエイリサーチ&コンサルティング) 高橋 佳太郎 (JICA海外協力隊)
長田 真弥 (姉ヶ崎ヶアセンター) 古川 雅一 (仙台医健・スポーツ専門学校)
高橋 恵里 (福島県立医科大学保健科学部) 三田村 徳 (東北医科薬科大学病院)

ゲスト編集：菊地 悠斗 齋藤 建也 中澤 拓馬 (仙台医健・スポーツ専門学校 理学療法科4年)

【研究会HP】 <https://int-rehabil.jp/>

【研究会FaceBook】 <https://www.facebook.com/pages/category/Nonprofit-Organization/国際リハビリテーション研究会-1951070205159667/>

fit-Organization/国際リハビリテーション研究会-1951070205159667/

【お問い合わせ】 国際リハビリテーション研究会事務局 jsir.office@int-rehabil.jp

【JSIR HP】

